

欧州におけるクリスマス・イルミネーションのトレンドについて

日大生産工 山家 哲雄

1. はじめに

11月の下旬を過ぎると、光都パリの表情は、街があちこちで「ノエル(Noël)の光」のベールをまとい、普段よりも華やかな雰囲気包まれる。特に12月になると朝夕の冷え込みが厳しくなり、陽射しも弱くどんよりとした曇り空に、時折、小雨や小雪が混じるような肌寒い天候が続き、一日も短くなる。この頃になると、街々に施されたイルミネーションは、その煌きが一層輝きを増し、光都パリの街中が、「光の饗宴 / イルミネーション・ノエル」と化する。

今回は、光都パリが御伽の国のように一年中で最も美しくなるクリスマスの光景の最新動向について、現地パリの調査結果に基づき報告する。

2. クリスマス文化^{(1), (2)}

欧州諸国のクリスマスの行事は、イエス・キリストの誕生日を祝う大切な宗教行事であり、12月は一年で最もホットな一ヶ月である。

パリでは、クリスマス・イヴとクリスマス当日は主に家族と過ごす。教会では、厳かに行われる祈りの中にキャンドルが灯り、光と宗教が密接な繋がりを持っていることを再認識することができる。

クリスマス前の約4週間は、アドヴェントと呼ばれ、大切なクリスマスを迎えるための準備期間である。この期間には、パリのあちこちの広場でクリスマス市(Marché de Noël)が立つ。皆が待ち焦がれた、何よりも楽しみにしている市で、露店の店先にはクリスマス・ツリーを飾るオーナメントなどのクリスマス用品が所狭し並ぶ。クリスマスの食材や食べ物、そしてヴァンショーと呼ばれるホット・ワインを売る屋台も出て、一日中賑わっている。夕暮れを迎えると露店の裸電球の小さなあかりが、幾つも重なり合って美しいクリスマス・イルミネーションと化し、ロマンチックな光景を創り出す。

子供達の楽しみは、ビュッシュ・ド・ノエル(Bûche de Noël)という、薪の形を模したクリスマス・ケーキである。薪の形については幾つかの説があるが、一説には「キリストの誕生を祝い、暖炉で夜通し薪を燃やした」ことに由来するとも言われている。

また、パリ市庁舎前の広場では、パリの冬の風物詩でもあるアイス・スケート場が設置される。

大人にも人気のようで、子供達に交じりスーツを着た若者、ショッピング袋をぶら下げた買い物帰りの女性達がスケートに興ずる姿を見ることが出来る(図1左、図1右参照)。

クリスマス・ツリーは、中世の降誕祭で行われたアダムとイヴの墮罪の舞台劇の序幕において、常緑樹のモミの木が禁断の木の果(リンゴ)を飾るために使用されたのが由来ともされる。パリでは街のあちこちに大きなクリスマス・ツリーが飾られる。パリで見かけるクリスマス・ツリーは、驚くほどに地味であるが気品があり、フランスのエスプリを感じるのは著者だけではないと思う(図2左参照)。



図1 クリスマス文化

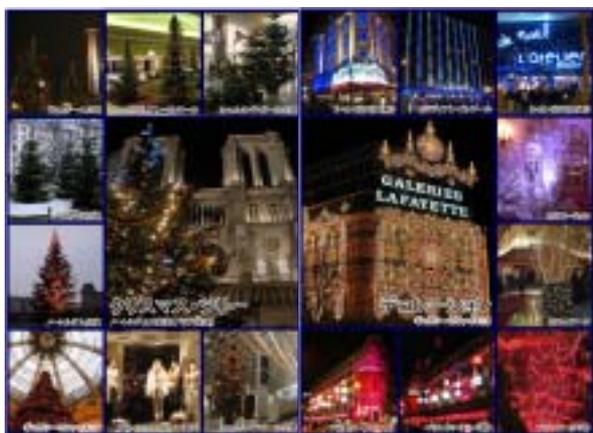


図2 クリスマス・イルミネーション

3. クリスマスの街あかり⁽³⁾

パリの街では、極彩色の建物、看板、ネオンサイン等々の設置が規制されているので、今日まで美しい街並みが保たれている。

街路や建物のクリスマス・イルミネーションは、豆電球を使用した 3000 K を中心とする光色が主流で、暖かく煌く優しい光に包まれる感がある。

ギャラリー・ラファイエットの本館を覆うゴージャスなクリスマス・イルミネーション、プランタンを彩る趣向を凝らしたクリスマス・ライトアップと電飾群、シャンゼリゼ大通りのカフェなどのクリスマス・イルミネーションの競演の醍醐味は、必見の価値があると思う(図2右参照)。

興味深いことに、2005 年まで希少であった LED を使用したクリスマス・イルミネーションが、2006 年度は一気に目立った。ただし、日本のクリスマス・イルミネーション事例のように、光色が七変化するような演出は見られない。節度ある意匠や光の使い方に、光文化の違いとお国柄が現れているように感じた(図3左、図3右参照)。



図3 クリスマスの街あかり(街路・建物)

4. Paris Illumine Paris⁽⁴⁾

Paris Illumine Paris (パリがパリを照らす) は、パリ市が 2004 年度のクリスマス季からスタートした新しい「光の祭典」である。パリ市内にモデル地区を選び、そこに若手の照明デザイナーらによって、光アートの性格が強い「光のインスタレーション」で、パリのクリスマス季の夜を彩る試みである。2004 年度(初年度)は 5 地区、2005 年は 10 地区、2006 年は 31 地区に、慣習的なクリスマス・イルミネーションとは一味違う、斬新で美しいクリスマス・イルミネーションが展開された。今年(2007 年)度は、54 地区へと拡大して催される予定である(図4左参照)。



図4 Paris Illumine Paris と ヴァンドーム広場

5. ヴァンドーム広場 -あかりの変遷-

ヴァンドーム広場は、世界最高級のホテルや一流宝飾店の老舗が軒を連ね、歴史と気品、豪華さが漂う、パリでも有数の美しさを誇る広場である。広場の中央には、ナポレオンがプロシア軍から奪った大砲をつぶして造った記念柱が建っている。記念柱の頂上には、シーザーの姿でローマの方向を睨むナポレオンの立像が据えられている。

著者の永続的な定点観測の結果、ヴァンドーム広場には、3 灯タイプの低ポールタイプの照明器具が計 60 柱(記念柱周り: 4 柱、車道用: 20 柱、歩道用: 28 柱、広場用: 8 柱)設置されており、通常期の夜間は、ほんのりと照明されており、ヴァンドーム広場の持つ歴史と気品にマッチした照明デザインである。

クリスマス季節には、毎年、思考を凝らしたコンセプトの基にクリスマス・イルミネーションが施される。特に昨年の 2006 年度は、記念柱の頂

上のナポレオン立像を強力なキセノン投光器により四方から投光照明し、ナポレオン立像の射影像(シルエット)を曇天時の天空に結像させるといふ、大変、迫力のある演出に驚愕した(図4右参照)。

6. おわりに

以上のように、今回は光都パリのクリスマス文化と光景を色々な視点から報告した。

わが国のクリスマスは、単にコマースリズムの性格が強い年中行事として、庶民の間に定着している感があり、クリスマス・イルミネーションの意匠や光の使い方の好みには光文化の違いやお国柄が、顕著に現れているように思う。

(参考文献)

- (1) Oscar Cullmann 著、土岐田健治・湯川郁子 訳:「クリスマスの起源」(株)教文館、pp.5~114(1996)
- (2) 鹿島 茂:「フランス歳時記 生活風景 12 か月」中央公論社、pp.1~243(2002)
- (3) 山家哲雄:「パリを思う パリ都市考」照明学会誌、Vol.89-No.6、(社)照明学会、pp.292~306(2005)
- (4) 山家哲雄:「欧州におけるクリスマス・イルミネーションの動向について」第 40 回照明学会全国大会講演論文集、p.136(2007)